KEI SOU
螢窓
2020年4月1日
vol. 25
東大阪大学・
東大阪大学短期大学部
附属図書館

今日学ばずして来日有りと謂うこと勿かれ
勿謂今日不学而有来日　〔宋、朱熹、勧学文〕

今日学ばなくとも明日がある、などと言ってはならない。
寸暇を惜しんで学ぶべきであることをいう。

研究室訪問

今回は「本に親しむ」という想いを主軸にしてお話いただきます。

実践保育学科　准教授
野﨑　之暢

プロフィール

2019年4月より東大阪大学短期大学部　実践保育学科所属。聖和大学卒業後約20年間、京都の専門学校における保育者養成に携わる。地域に根差した研修等にも積極的に努める。描いたり造ったりする活動を好み、授業に活かすことも多い。「保育は人なり」…業界の想いが在校生に少しでも伝わるよう丁寧な指導を心掛けている。

――記憶の中、最初に自分で買った本は何でしょうか。

『1973年のピンボール』村上春樹（講談社）。アルバイトしたお金で初めて買った書籍はたぶんこれだったと思います。

――好きなジャンルは?

もともとあまりこだわりはない方だと思います。面白そうなら手に取る感じで、ジャケ買いもします。歳を重ねるにしたがって、読みたいジャンルもさらに広がっている感じです。

――本を買う時、ネット書店と本屋と、どちらをより多くご利用でしょうか。

最近は隙間時間に読めるよう、スマホ等のデジタル機器を使うことの方が多いので、ネット経由が大半を占めるようになりました。防水モデルで入浴しながら本を読んでいることもあります。

――いま、お手元に読んでいる本は?

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』ブレイディみかこ（新潮社）

――時々読み直す本はあるでしょうか。

①『こころのチキンスープ―愛の奇跡の物語』ジャック・キャンフィールド他（ダイヤモンド社）。そのなかでも特に「窓」という短編は、いつでも読めるように目のつくところに抜粋して掲げています。
②『中国行きのスロウ・ボート』村上春樹（中公文庫）。不思議なもので、20代からこの何とも味わい深い短編集が手放せません。文字通りボロボロになっていますが、そのまま手元に置いています。

――もし蔵書の中一冊だけ選ぶなら、どの本を選びますか。その理由は?

『子どもはみんな問題児。』中川李枝子（新潮社）。石井桃子（児童文学作家）氏の「人はことばによって人になる。ことばを定着させるものとして本がある」という一節を紹介されていたり…保育者として努めた著者だからこそ書ける内容（センス）にとても共感することができるからです。

――読書の醍醐味は?

近年はSNS等、文字にふれる機会は極端に多いように感じます。しかし不思議なもので「練られた文章」と捉えられる文体は、圧倒的に新聞や書籍で出会っている感覚が強い印象です。人との出逢いを軸にしたような小説系は特に…自分好みの勝手なキャスティングで色づけながら読み進められるので、お得ですよね。映画一本を格安で観ている感覚に近いです。

――座右の銘をお教えください。

「ぜんざいには塩がいる」。買ってでも苦労したいタイプではありませんが…魅力的な人生ってそうした要素もないと充実しないのだろうなと認識しています。

――学生にぜひ読んでもらいたい本は?

①有川　浩
『図書館戦争』（角川文庫）
『阪急電車』（幻冬舎文庫）
『植物図鑑』（幻冬舎文庫）
…舞台劇を観ているような感覚で最後まで一気に読み進めたくなりますね。
②森　絵都
『カラフル』（文春文庫）
『みかづき』（集英社）
…こちらもすっと読める文体ですが、密度濃く教えられる感性に溢れていて…ゆっくり時間をかけて読みたくなる感じです。
③『二番目の悪者』林　木林（小さい書房）
森さんへの感覚と同様の絵本版といった感じです。これから「先生」という職種に就かれるのであればなおのこと、一度は触れておいてほしいおとな向けの絵本です。

――読書について、学生、特に新入生へのアドバイスをお願いします。

「素敵な曲を見つけた！」「可愛い服ゲット！」「面白い漫画を知ってる！」「奥深いゲームはこれだ！」…という感覚と同じレベルで私は「本」を捉えています。

私は仕事にしても生活にしても、貪欲に何かが欲しいタイプではなく、身の丈に合った心地よい暮らしをしたいだけなので…自分をよく知り、自分に合う物事を丁寧に選択する感覚で、本と出会っていっている感じです。

遠くで見ているだけではよくわからないので、まずは気分に合いそうなものを手にとってページをめくり、気に入ったものがあればラッキー。違えば棚に戻す。あれこれ視聴?試着?試読?する時間も含めてワクワクするところが魅力です。自分に似合うアイテムを増やす感覚で「本」を選び、ちょっと読んでみようかくらいの感覚で良いのではないでしょうか。

一番ソンするのは食わず嫌いです。出会わないと何も始まりません。人間は物事に出会い、その内容に興味をもてば、努力もするし工夫もする生き物ですから。

本あれこれ vol 5

童話と辞書と私

こども学科　講師　今井 美樹

私は、特別に「読書好き」な子どもではなかったが、それでも、家にあったイソップ寓話やグリム童話などは印象深く残っている。

イソップ寓話は、古代ギリシャ（紀元前619年～紀元前564年ごろ）の作家アイソーポス（Aísōpos=イソップ）が作ったとされる寓話を集めたもので、動物や生活雑貨、太陽と風などの自然現象、旅人など名も無き人々を主人公にし、比喩によって人間の生活に馴染み深い出来事を見せて、道徳的な教えを諭すことを意図した物語である。「アリとキリギリス」や「金の斧」などはつとに有名である。主人公やその敵対者が、ある出来事に遭遇したり、ある結果を引き起こしたりするくだりは、文章や挿絵を通じて、想像力がかきたてられる。

一方、グリム童話は、グリム兄弟が編纂したドイツのメルヘン（昔話）集で、1812年に初版第1巻（86編）、1815年に第2巻（70編）が刊行されている。現在170以上の言語に翻訳され、多くの人々に読まれ、多くの挿絵が描かれた文学とされている。日本でも「灰かぶり（シンデレラ）」、「赤ずきん」、「白雪姫」、「ヘンゼルとグレーテル」などは知る人が多い。食べることが好きな私は、ヘンゼルとグレーテルに出てくる「お菓子の家」は、どんな味のお菓子でできてるんだろう？と、食い入るように絵を見ては、何度もよだれを垂らしそうになったものだ。

家や身近なところに本がある生活は、時間があれば本を手に取り、何度も読み返し、その都度新しい発見をしながら想像し、記憶が増幅されていく。それらは、本のカバーの絵や色、紙の匂いや手触りなど、五感の記憶とともに刻まれていく。だからこそ、半世紀以上たった今でも、子どもの頃に感じた感情を鮮明に思い出すことができるのだろう。

小学校高学年になった頃、母が国語辞典を買って、辞書の引き方を教えてくれた。その頃の私は、テレビで聞いた言葉の意味、例えば「サンカンシオン」という音だけでは「三寒四温」とは理解できず、その都度母に尋ねていた。国語辞典をもらったのはその頃だ。革の表紙や辞書独特の薄紙、そして、その手触りと匂い…。少しお姉さんになったように感じたものだ。

自分の辞書を持つようになってからは、本を読みながらわからない言葉や文字を調べることが面白くなり、こまめに辞書を引いていた。辞書の面白さは、ひとつの言葉を調べると、その言葉の意味だけではなく、使い方や類義語、反対語なども書かれていて、言葉の意味がイメージしやすく、知識も広がるところだ。

近年、インターネットの普及に伴って、本も紙からデジタルへと移行しつつあり、辞書はデジタル化されて、簡単に検索することができるようになった。子どもが読む絵本も、スマートフォンやタブレットで読めるデジタル版も増えている。

インターネットやデジタル化によって、誰もが簡単に情報にアクセスできるようになり、便利になったことは事実である。しかし、紙の本には、デジタルでは得られない情報が詰め込まれているという。そのひとつが、本をパラパラとめくるだけで、なんとなく全体像がつかめる点ではないだろうか。また、紙の本は視認性が高く、見開きや頁全体をレイアウトとして、絵のように捉えることができる。例えば、縦書きの本ならば、右に大きな文字でタイトルが書かれていて、左のページにはイラストが書かれている等だ。読んだ内容がこれらの情報と結びついて記憶として蓄積される。

脳科学者の茂木健一郎氏によると、脳科学の観点から言うと、本を読んで何かに感動したり、興味を持ったりして、その後、読書体験を重ねてその感動や興味がさらに深まることを繰り返すと、読書に関係する回路が強化されるのだそうだ。そして、その結果、論理的思考力やコミュニケーション能力が高い「地頭（じあたま）」の強い子になるという。

保育においては、子どもが「遊びを通して豊かな経験」をすることで、「生きる力の基礎」を身につけていくことをめざしている。そして、発達を促す環境の一つとして、絵本や童話、紙芝居、劇などに親しむことを推奨している。これらによって子どもは擬似的体験をし、多くの気づきや学びにつながる。

私自身、ことあるごとに本に問い、心の安定や解決策を見つけることができた。子どもたちが気軽に本に触れ、本を楽しみ、感じたことを大切にすることで、将来、悩んだり、迷ったりしたときにも、本を通じて解決法や心のあり方を学び、力強く生きて行ってほしいと願う。保育に携わる者として、そのための環境づくりにも取り組んでいきたい。

新着図書

さまざまな視点から見た「コドモ」

『大阪ミナミの子どもたち　歓楽街で暮らす親と子を支える夜間教室の日々』（金光敏著、彩流社）は、著者が運営している外国ルーツの子ども夜間学習教室の活動記録である。歓楽街でさまざまな問題を抱える子どもとその親たちの数々の悲しい事例。孤独、家族の離散、貧困、行政側の問題等々によって子どもの可能性を狭めてしまい、子どもたちの自信を無くしてしまう。外国ルーツの子どもたちが増える昨今、多文化共生教育を如何にすればいいか、考えさせる好著である。アンケートやインタビューなどから、日本統治下の京城（現・ソウル）にあった高等女学校卒業生の声を読み解く『帝国に生きた少女たち　京城第一公立高等女学校生の植民地経験』（広瀬玲子著、大月書店）は、支配者として不自由なく育った少女たちが戦後初めて気づいた被支配民族の人々の苦悩、彼女たちが体験した植民地朝鮮の様子を生々しく伝える。『「誉れの子」と戦争　愛国プロパガンダと子どもたち』（斉藤利彦著、中央公論新社）の「誉れの子」とは、本書によれば、「大日本帝国の戦争において『名誉の戦死』をした兵士たち、すなわち『護国の神』として靖国神社に祀られた戦歿兵士の遺児たちのことである」。戦中の1939年から1943年まで、毎年各地の戦没者の子どもたちを集め、靖国神社を参拝させる「社頭の対面」という行事が行われていた。この行事によって肉親の戦死は国民教化の手段として利用される。国家が如何に情報操作をしたか、かつての「誉れの子」の証言で明らかにされる。

『大阪ミナミの子どもたち
歓楽街で暮らす親と子を支える夜間教室の日々』
（請求記号 369.41/Ki38）

『帝国に生きた少女たち
京城第一公立高等
女学校生の植民地経験』
（請求記号 221.06/H72）

『「誉れの子」と戦争
愛国プロパガンダと
子どもたち』
（請求記号 210.75/Sa25）

『風の電話 ―大震災から6年、風の電話を通して見えること―』

先ごろ、同名の映画が上演されていた。その原作といってもこの本は小説ではないので映画はこの本に描かれた「風の電話」をもとにストーリーが作られている。

2011年4月、東日本大震災の直後に岩手県大槌町浪板に著者が作ったガーデン「ベルガーデン鯨山」のなかに「風の電話」は誕生した。設置計画は震災の前から始まっていたのだが、奇しくも震災直後に完成することとなった。

この電話ボックスの線は繋がっていない。だから本当に話すことのできない人と繋がることができる。震災後この電話の存在を知り、多くの人が会えなくなった大切な人と話に来たという。「グリーフを抱えた人たちに共通するのは、悲しみに苦悩する姿を他人に見られたくないという心理だ。メディアの方からマイクを向けられると『元気です、頑張っています』と答えている（後略）」本当は、誰にも見られない、ひとりになれる電話ボックスの中で、周囲に気兼ねなく自分をさらけ出して泣いている。

「1分、1秒の差で誰もが犠牲者となりえた状況。（中略）そうであるならば残り少ない生かされた命を、自分の為だけでなく『誰か他人の為に役立てる』人道的な生き方をしなければならないと考えた。（後略）」そんな著者と「風の電話」に通ってくる人々との思いを温かく感じることができる一冊である。

『風の電話 ―大震災から6年、
風の電話を通して見えること―』
（請求記号 146.8/Sa75）

2019年度 第2回 学生選書ツアーを開催しました！

2019年11月27日（水）に第2回学生選書ツアーを開催しました。9人の学生さんと一緒にジュンク堂書店難波店へ行き、読みたい図書を選んでもらいました。選ばれた図書（97冊）は図書館1階閲覧室の学生選書コーナーにありますので、ぜひご利用ください。

こども学科 2年 久保村さんのおすすめ
『赤毛のアン』
朝ドラ「花子とアン」を見たのがきっかけで選びました。元々、英語で書かれていたのが日本語訳で書いた小説なので、とてもおすすめです。

こども学科 2年 池田さんのおすすめ
『たっぷり！年中行事シアター』
『親子で作る 世界でたった ひとつの宝物 手形アート帳』
幼稚園や保育所以外にも製作を作るときに参考になると思ったので選びました。

こども学科 3年 数村さんのおすすめ
『事例に学ぶ不登校の子への援助の実際』
卒業論文のためにと思って選びました。実際の事例を元に考察が書かれているので、実践で役に立つことばかりです。

こども学科 3年 岡さんのおすすめ
『ふんどし育児』
毎日毎日大変なおむつ交換がとても楽になります。

みんなにも読んでもらいたい♪

参加した感想

- 思ったよりもいろいろな本を選ぶことができた。選んでいる時に「あ、これ知ってる、読みたい」と思う本がいっぱいあって楽しかった。
- ほしい本が選べてみんなとの交流ができて楽しかったです。
- 前回行ったときには興味がなかったり手に取らなかった本にも関心が広がっていたので、大学で勉強したことが反映されているのかなと思いました。次回も参加したいと思います。

教員 近著・訳書

＼ 本学の教員が携わった書籍をご紹介します ／

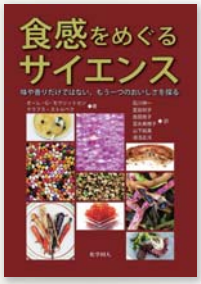
松井欣也教授　単著

『災害時こそ昆虫食』

松井欣也(著)
ドニエプル出版　2019年12月24日　500円+税

(請求記号 383.8/Ma77)

「昆虫食」に対する世間の悪印象を払拭する目的で執筆された本書は、「昆虫食」の文化、「昆虫食」の歴史など、「昆虫食」に関する知識が満載。持続可能な食物としての「昆虫食」の今後についても巻末で触れられている。一読して「目から鱗」という醍醐味を満喫できる。



山下絵美准教授　共訳

『食感をめぐるサイエンス』

オーレ・G・モウリットセン、クラフス・ストルベク 著
山下絵美(石川伸一、萱島知子 他3名との共訳)
化学同人　2019年8月20日　4,000円+税

(請求記号 498.51/Mo96)

料理と味覚の関係を研究するデンマークのコペンハーゲン大学教授と名高いシェフが合作した結晶である。食感が味の知覚にどう関わるか、その解明に挑戦すると同時に、新しいレシピも収載している。

趙夢雲教授　単著

『上海非常時 可東己之助漫画解読』(邦訳『上海非常時可東みの助漫画を読み解く』)

趙夢雲(著)
上海三聯書店　2019年6月　38元

(請求記号 222.21/C52)

中国語書籍。漫画家可東みの助の上海時代とその作品を通じて、在留邦人を含む戦中及び戦後上海社会の考察を試みる。「可東みの助の生い立ち」「戦時上海の素描」「戦時上海の邦人社会」「戦後上海の邦人社会」の四章からなる。近年注目されている「外地文化・文芸」研究の空白の一つを埋めようとする一冊。

渡邊ルリ教授　共著

『上海の戦後 人びとの模索・越境・記憶 アジア遊学236』

渡邊ルリ(髙綱博文・木田隆文・堀井弘一朗編 23名による共著)
勉誠出版　2019年7月31日　2,800円+税

(請求記号 302.2/Sh12)

終戦から「新中国」成立まで、重慶から戻ってきた国民政府支配下の上海の「戦後」に焦点を当て、その時代を体験した人たちの「模索」、「越境」と「記憶」を意欲的に取り上げた論文集である。わずか4年間という短い時期だが、対日協力者に対する審判、留用日本人の苦悩、物価の高騰と内戦の勃発等々、戦後上海の多様性、社会の激動に注目し、上海研究の新たな課題を提示している。各章に「コラム」が挿入され、読みやすい工夫も施されている。

読書感想文コンクール結果発表

2020年2月27日(木)、附属図書館内で読書感想文コンクールの表彰式を行いました。
受賞者には表彰状と副賞が授与されました。

▲萬谷 呂稀さん(左から2番目)、金　宸年さん(中央)

優秀賞　「地獄は空っぽで、悪魔はこの世にいる」
金　宸年さん(アジアこども学科 1年)
『王様ゲーム』／金沢 伸明 著

優秀賞　「『Peter Pan』を読んで」
ビラディナさん(アジアこども学科 1年)
『Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy』／J. M. Barrie著

佳　作　「私に足りないもの」
萬谷 呂稀さん(実践食物学科 1年)
『錦織圭 マイケル・チャンに学んだ勝者の思考』／児玉 光雄著

▲ビラディナさん(左から2番目)

データでみる図書館

●2019年12月末現在のデータ

図書(和書)	75,668冊
図書(洋書)	6,600冊
視聴覚資料	3,663タイトル
雑　誌	613タイトル

●2019年1～12月の利用数

貸出冊数	3,123冊
入館者数	3,473人

螢窓 第25号　2020年4月1日発行

■ 編集・発行
東大阪大学・東大阪大学短期大学部附属図書館
大阪府東大阪市西堤学園町3-1-1
TEL 06(6782)2837
FAX 06(6782)2879
http://www.higashiosaka.ac.jp/~library/

巻頭言 出典：鎌田正、米山寅次郎著『漢文名言辞典』大修館書店　1995年9月1日初版発行、1999年3月1日5版発行　P.99